佳作

選択課題1 文武両道

二兎を追うもの

みやかわ
れいな
宮川玲奈

(東京都／白百合学園高等学校二年)

序章 はじめに

二兎を追うものは一兎をも得ず、という

格言は狐師であれば正しいだろう。どちらかをあきらめ、足の遅いほうの兎を選んで追いかけることが狐師の適切な選択とな

る。しかし、人が勉強とスポーツや芸術とを両立させようとすることは適切だし、褒められることだ。猟師との違いは、一人の人間が自分の中で兎（二つの目標）のパランスをとることができる点にある。

三歳からの十三年間をクラシックバレエに費やしてきた私にとって、二兎とは学問とバレエである。学歴社会では勉強ができてことが大事だとは言っても、学校の勉強や試験の成績が重要視されるのは大学受験辺りまでだ。社会に出る頃から話は変わってくる。企業でも学校の成績だけで採用を決めるところはない。本人の人間性や適応力、社会性が評価基準として浮上してくる。

私はここに、学問の社会的意味を問い返しつつ、学ぶ私達のあるべき姿勢や文武の関係、更には文と武の両立について考察したい。

第一章 大学の意味

高校生の私にとって、大学は最大の関心事である。大学は教育とともに研究を行う場所であり、また多くの学生にとって社会人となる前の最後の学校であり、あるいは様々な意見が発信され活動が行われる学生

の一つの共同体と言うこともできる。文部科学省の「学校基本調査」によると、大学進学率は平成二十七年現在、五一・五％である。世の中のほぼ半分の人間が大学に行く時代。大学が大衆化する中で、学生の変化、社会との関わりの変化を探る。

現在、「大学の就職予備校化」が叫ばれている。大学を紹介する書籍では「就職に強い」「就職力」などの見出しが並び、大学に手厚い就職支援が要求されるようになってきている。「社会で直接役立つ実学」は就職の際に強みになるであろう。よって、大学を評価する際に重視する点の一つに挙げられる。

就職活動は激化しており、大学本来の学業の妨げになっていくとの批判は根強い。安倍政権が「学業に専念させるべきだ」と経団連などに要請し、昨年は就職活動の開始時期を八月にしたが、わずか一年で六月に前倒しされるなど、就活日程はめまぐるしく変化している。これはそれだけ問題が深刻化していることの裏返しである。

また、「大学全入時代」に入り、大学は入学者を奪い合っている。より多くの学生に入学してもらうためには学生のニーズに

合わせる必要があり、その大きな要素の一つが就職活動支援なのである。近年、「国際コミュニケーション」「グローバル教養」「キャリアデザイン」「リベラルアーツ」などといった名を冠した学部が目立つようになってきた。この「大学の就職予備校化」はある意味、大学が「ビジネス化」していると言えないだろうか。大学教育が「商品化」され、教育そのものについて軽視されているように感じられる。

では、明治から今に至るまで日本の大学は、どのような役割を果たしてきたのか。明治においては近代化のため西洋の学問を取り入れ、国家の担い手を養成するための役割を果たし、国家と密接に結びついていた。しかし、大正期に入ると国家からは距離をとり、学問自体に専念する傾向が強まった。戦争が近づき軍国主義が強まると、大学の学問は「検閲」され、危険な思想・研究は弾圧され、戦争を支持する大学教授の意見や天皇制を確固たるものとする意見は利用されていった。戦後、エリート養成の役割は薄れ、広い国民の一般教育を主な役割としていくようになる。企業が求める人材を育成することが大学の求められる役

割となった。

大学進学率が上昇してきた中で、大学を志願する最大の動機が「就職に必要なから」であることは明白である。学歴は重要性を失いつつも、ますます必要不可欠なものとなり、実際に高卒の就職率は大卒の就職率よりも低くなっている。企業が基礎学力として重視するのは学歴であり、それはすなわち大学に入るまでの学力である。大学における成績は選考基準から外されるようになり、大学で何を学んだかについて企業は関心を払わなくなった。こうなれば、「就職に必要なから」進学した大学生にとって、大学での学びはさほど重要ではなくなる。これは大学教育の空洞化である。卒業のハードルが低い日本の大学において、大学に入った時点で学歴はほぼ獲得されたも同然であり、学生にとって大学進学最大の意味は終わってしまうのである。

とすれば、大学において得られるものは何であろうか。学問をするという、学ぶという経験を通じた人間形成に私は焦点をあたいたい。学問は、「わたしとは何か」という問いから自分の存在について追究しようとするものであると私は考える。「わたし

とは何か」を考えるには、「わたし」そのものだけでなく、「わたしを取り巻くもの」を知らなくてはならない。数学や自然科学は、自分の生きている世界の科学的法則を知ろうとするものである。社会科学や人文科学などは、過去から現在の人間の営みや社会のあり方を知ろうとし、自分の生きる人間社会を知ろうとするものである。これこそ福澤論吉が唱えた「美学」であろう。自分がどのような世界に生きているのかを知ることは、自分を知ることとはできない。この知ろうとする努力は、まずは先人の学問を参考にする事となる。人文科学系でいえば代表的な古典作品を読むことが中心になってくる。そして、先人の学問に対して自分がどう考えるのかが重要になってくる。先人と「学ぶわたし」とに生じた違いを知ることが、「わたしとは何か」に近づくことである。しかし、人間の自己形成は古典における先人との「対話」より、実社会における人との「対話」のほうが大きな意味を持つことが多い。学問を究めても人に伝えようとしなかったり、できなかつたりすれば、究めたのかどうかわからない。また究めるための議論ができないほど

コミュニケーションが苦手であれば、先達の知識や問題意識を把握できない。福澤は自らの演説の中で、学問で大切なのは読み書きの前に話すことだと主張する。

そう考えた際に、明確な大学の意義が現れる。それは、同世代の学生が大学を中心とした空間を有することである。身近に議論し合い、共感し合い、批判し合える存在が多くいること。人間交際。お互いに刺激し合い、他者の意見に耳を傾けることは、学問をする上では大きな役割を果たす。

第二章 組織とコミュニケーション

私が中高時代最も力を入れてきたものは、五年間続けてきた部活動ESSである。中三では裏方として部を支え、高一ではダンスの振付など、主に後輩のサポートに回って部全体を見渡し、足りていないところを後輩に教えるなどして部運営に携わってきた。この二つの違った立場から部の運営をすることを経験し、多くの問題に直面してきた。同じ趣味を持つ者同士でありながらも温度差が激しくなってしまうなど、次々と問題が発生した。私はなぜ部内が悪い方向へ進んでしまったのかと考えた結

果、コミュニケーション不足が原因だと考
えた。後輩と多くの時間を関わってきた中
で、生まれた時期が異なれば人も異なるた
め、コミュニケーションの仕方でも変化させ
なければいけないことを知った。中一から
高二の歳の離れた人達と同じ内容の情報を
伝えなければならぬので、より部内での
コミュニケーション方法の重要性を強く感
じた。部活動とは「自分のことを他に伝え、
他（先輩・後輩）の言ったことを学ぶ絶好
の場」だと言えよう。コミュニケーション
の前提として、他者と共通する経験を持つ
必要がある。幅広い行動を通じて経験を積
み重ねることが、他者と共通の基盤を構築
し、他者からの信頼を獲得する道となる。
また、より多くの経験と知識や意見の交換
を通じて、人はより多くの満足を得ること
ができる。

人の集まりである様々な組織、例えば大
学やスポーツチームにも同様のことが言え
そうだ。そもそも組織は何かの目的を持つ
て営まれる。その組織の活動は隣人、政府、
別の組織、あるいは組織に所属する個々人
と相互に影響を与え合うことになる（目的
を持って営むから、影響がなければ意味がない）。

何らかの影響を与える別の組織とコミュニ
ケーションをとる必要が出てくる。また、
コミュニケーションが向上すればチームワ
ークを発揮することができる。そこで重要
になってくるのは、不規則に変化する環境
の中で対応していけるリーダーシップだと
考える。組織内の人の目標を一つの方向に
向けさせ、一体感のあるチームを作るのは
それぞれ一人ひとりにリーダーシップを発
揮することが重要になる。福澤は「学問の
すすめ」で一身独立するために学問が必
要だと語っている。結局リーダーシップを
学ぶことが望ましいと考えられるのは、
様々な場におけるコミュニケーションの経
験の蓄積が、将来、より責任のある（幅広
く人々に影響を与える）意思決定の準備とな
ることを、社会の構成員が知っていること
に依拠している。

第三章 武の捉え方

次に武とは何か、学問と関係性はあるの
か見ていこう。

私は十三年間のバレエ生活の中で、効果
的トレーニングとは何かを考えることがし
ばしばあった。同じトレーニングをしてい

ながら、教室の仲間はコンクールに選ばさ
れたが、私は選ばれることがなかった。
力不足と言えればそれまでだが、自分に合っ
たトレーニング法を見つければ、確実に効
果は表れるはずだと考えた。優れた競技選
手の中には自身の素質を理解し、トレーニ
ングを行っている者もいる。私がリオオリ
ンピックで注目した選手は、競泳界のマイ
ケル・フェルプスだ。彼は背が高く、痩せ
た体格、長い手足、それに柔らかな関節を
持ち、少ない抵抗で泳ぐことができる。こ
れらの特徴はマルファン症候群という遺伝
子異常に類似している。彼のような遺伝子
特徴を持つ人は、一般的に筋力が他の人よ
りも少ないということも遺伝子解明の技術
によりわかってきているという。このように遺
伝子から個々人の身体的素質がわかれば、
その長所を活かし短所をカバーする練習を
効果的に取り入れることができる。そして
アスリートのパフォーマンスの向上に役立
てることが可能になる。実際、フェルプス
は自身の遺伝子的素質を知り、それに合わ
せた練習を行っているため、驚異的なパフ
ォーマンスを披露することができている。

しかしながら、研究は欧米が中心で日本

では遺伝子による身体的素質解明をトレーニングに活かそうとする動きがまだまだ少ない。今年七月二十一日の朝日新聞の記事によると、早くから研究が進む「ACNTN3」以外に「GALANT6」という遺伝子に運動能力と共通の特徴が見つかったという。研究に課題は残るが、これがアスリートの育成になれば日本人アスリートの活躍する場が増え、スポーツビジネスの発展にも寄与できるだろう。スポーツとは、

頭で考えることと体を動かすこと、その両方をバランス良く鍛えていくものだ。福澤が言う通り、スポーツも勉強であり、自分の頭で考える力を養い、半学半教で高め合える。

先日、形成外科の先生から興味深いお話を伺った。年号を覚えるという一見無意味な勉強と思えることも、脳のトレーニングとしては大事なことだ。脳内の情報伝達に欠かせない神経回路はできたてだと非常に弱く、使われないと消えてなくなってしまう。外界からの刺激を受ける回数が多いほどシナプスの数が増え、神経回路が密に繋がって働くようになる。脳が衰えると指一本動かせなくなる。筋肉を鍛えるのに腹筋

をすることと同様、脳もまた神経回路を強くしていくトレーニングが必要である。文武両道というのが、脳にとっての学びとは武と捉えることができる。

第四章 文と武の両立

前章で、武も文、文もまた武である点について考察した。この章では、文と武は両立できるか見ていこう。文と武はともに専門知識を身に付けるだけでなく、「問題を見つける力」と「議論する力」を磨く必要がある。そして環境、とりわけ「出会った人」と「組織」によって人は成長する。

ここで一つ問いかけてみたい。

『あなたの通う大学が多額の寄付金を贈られました。その寄付金は、より多くの本やコンピューターを備えた新しい図書館の建設か、またはトレーニングルームやプール付きの新しいスポーツ施設のいずれかに費やすことができます。寄付金の使い方としてあなたはどちらがよいと思いますか』

通常最もよく起こりうることは、図書館やコンピューター室など、明らかに直接的な教育上の価値がある施設や備品が、音楽ホールやスポーツ施設など教育上二次的なもの

のと一部の人達によって考えられているものに優先することである。一方、新しいスポーツ総合施設の建設によって学生が得られる利益はたくさんある。大学の目的は均衡のとれた教育を提供することである。もちろん質の高い学問的な教育を提供することも含まれるが、その他にも学生の全体的な健康の助成もすべきである。トレーニングルームもある新しいスポーツ施設は学生の健康維持を促進する。身体の健康が知力を最大限に発達させる主要な要素であることはよく知られている。さらに新しいスポーツ施設は、学生にとって多くの社交の場にもなる。トレーニングルームや体育館で他の学生と交流するようになるだけでなく、大学のスポーツチーム向けの新しい施設があればスポーツイベントへの参加がより魅力的なものになる。

「図書館」を選ぶか「スポーツ施設」を選ぶか。問いの前提になる最も大切なことは、「一つの正解たる解釈を目指す」ことをしない柔軟さなのだある時気付く。解釈の多様さの中で答えを探す、それこそ一つの実践なのではなからうか。要するに文と武は「共通点も相違点もあるが、いずれ

か一方が優先されるべきではないもの」と関係づけることができるであろう。

では、両立するにはどうすべきか。もっとも単に目的を拡散し、食い散らかしても得るものはない。サッカーをしながら(ボールに追いつけないので)突然ジョギング(をしいたことにする)に切り替えるのが愚かであるように、適切なタイミングに適切なバランスをとることが難しいが重要である。

第五章 知と社会

今の社会で求められる知識・能力と、大
学で教わる知識の間には大きな距離があ
る。かつて日本の組織ではスペシャリスト
よりもジェネラリストが重用されてきた。
役所の人事ローテーションが典型だが、い
ろいろな部署を担当することにより様々な
分野の知識を広く持つことがリーダーの見
識だと思われてきた。世の中の変化のスピ
ードが遅かったため、勉強で得た知識で相
当程度ごまかされた。しかし、複雑な現代社
会では、それぞれの分野でプロフェッショ
ナルとして深い知識を要求されるとも
に、従来以上に幅広いマルチな知識が要求
される。いろいろな分野で必要とされる知

識が増え、かつ凄まじいスピードで変わっ
ている。法律の世界を例にとると、かつて
は「大先生」と呼ばれる人生経験豊かなシ
ニアの弁護士がその経験に基づいてアドバ
イスをしていけば事足りた。ところが、こ
の十年の変化は状況が一変している。特に
ビジネス法務の世界では、今、会社法その
ものが全く新しくなった。昔勉強した知識
では役に立たなくなり、最前線に常に勉強
していなければいけない状態になってい
る。同じようなことが至る所で起きている。

医療の世界でも、一方においては各診療科
が細分化され高度化していき専門性が求め
られる。その一方で救急医療のように窓口
の幅広さも求められている。教育現場では
学校作りのチームの一員として組織的・協
働的に諸課題の解決のために取り組む専門
的な力の醸成を教師に求める。来春施行さ
れる大学設置基準で、大学職員には職員の
能力や資質を向上するための欧米の大学視
察が義務づけられた。スポーツの世界では、
体操日本男子団体を見てみるとジェネラリ
ストに加え、スペシャリストが力を発揮し、
八年ぶりに金メダルを獲得した。どの分野
でも高度な専門化と統合的な知識の習得を

生涯にわたって学習していくことが求めら
れている。

このような社会で大事なものは、溜め込ん
だ知識ではない。いろいろな経験から身に
付いた想像力や新たな知識に向かつていく
好奇心だ。また、自分の知らない知識を持
っている他の専門家と一緒にやっていくと
いった社会性だ。福澤は学問によって社会
に貢献することを目的に私塾を作った。学
問の意味は社会に役に立つこと、社会が豊
かになることにあるのではないだろうか。

常に学問と社会のつながりを意識し、コミ
ュニケーションをとらなくてはならないの
ではないか。とするならば、学問は最終的
には世の中に「知」を送り届けなければな
らないのである。また、「社中協力」とい
う言葉の意味するところ、交際も福澤が重
要視した点だ。友達付き合いもスポーツ仲
間との付き合いも、社会性を身に付ける大
事な機会だ。損得抜ききの学生時代の人間関
係から学ぶ他人との関わり合いは人間関係
の基本である。

第六章 おわりに

今回、自分のこれまでを振り返って「二

兎を追って二兎を得る」を念頭に本論を展開してきた。独立自尊、自我作古を教育理念と掲げた福澤ならば二兎を追うことは容易ではないが、意欲的に生きよと指導してくれたにちがいない。一見、一兎に見えるものが実は数兎だった、ということもある。逆に考えれば、結局のところ私達が追い求めているのは一兎に過ぎないようにも思うのである。その一兎とは「私の人生」そのものである。

現代では、今までの細分化する傾向の強い学問姿勢から、諸学、文理を超えた融合的な教養を持つと努める学問姿勢のある人間が必要であるという人もいる。視野の狭い人間ではなく、様々な学問のノウハウを蓄積し、提供する。そういう形で社会に貢献できるようになりたい。

《参考文献》

- 阿部謹也『教養とは何か』(講談社一九九七)
天野郁夫『大学改革を問い直す』(慶應義塾大学出版会二〇一三)
荻谷剛彦『イギリスの大学・ニッポンの大学』(中央公論新社二〇一一)
佐伯啓思『学問の力』(NTT出版二〇〇六)

竹内洋『教養主義の没落 変わりゆくエリ

ート学生文化』(中央公論新社二〇〇三)

福澤諭吉『現代語訳学問のすすめ』(岩波書店二〇一三)

福澤諭吉『現代語訳文明論之概略』(慶應義塾大学出版会二〇一〇)

福澤諭吉『福翁自伝』(岩波書店二〇〇八)

湯川秀樹 他『著名人が語る(考えるヒント)』(リブリオ出版一九九七)

吉見俊哉『大学とは何か』(岩波書店二〇一三)

『朝日新聞』二〇一六年七月二十一日朝刊

一一一